

---

# とある魔術の幻想実現

ジュン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術の幻想実現

### 【Nコード】

N9844N

### 【作者名】

ジュン

### 【あらすじ】

可能性が『0』で無い限り、どんな事でも可能とする能力…『イマジニア幻想  
チーフメント』を持つ篝火連夜が、原作に介入していく物語。

この物語はチート性が高いと思われます。

## 第一話 プロローグ？（前書き）

更新はなるべく早めにすると思っので、見てくれると有りがたいです。

## 第一話 プロローグ？

学園都市。

人口約230万人でその8割は学生という学生の街で、最先端の科学技術が研究・運用されており、都市の内外では数十年以上の技術格差が存在する。

また、超能力研究を行い、脳を開発することで超能力者を作り出している。

そんな、超能力が大抵の人間に手に入るというある意味夢の場所であるワケなのだが、その夢の場所で何故か俺こと かかりびれんや 篝火連夜は、我が不幸なる親友 おひ 上条当麻と共に鬼ごっこ……もとい、死の逃走劇を行わされている。

「待ちなさいよー!!」

そう言っつて俺を追い掛ける鬼……いや、女の子であるワケなのだが、その女の子は学園都市でも7人しかいない『超能力者』の第三位……『レールガン超電磁砲』御坂美琴、その人。  
よって、この鬼ごっこは大抵の人間にとって、追い付かれたら死ぬという命懸けなモノなのだ。

「不幸だー！ー!!」

「チイツ!!めんどくせエ!!!」

まず、こうなったのにも理由がある。

決して、遭遇 鬼ごっこ開始!とか、そんな理不尽なモノではない。不良に絡まれているところを女の子を当麻と共に助けに入り、口論で俺達が『ガキ』だの『中坊』だの『子供』だの『ロリコン』だの連呼してたら、その女の子である御坂美琴がキレて不良を黒焦げに…。

そして俺達は逃走し、現状に至ったワケなのである。

「止まりなさい……よ!!」

そうやって御坂美琴は俺達に向け、電撃を放ってくる。

「っおッ!?!」

俺は咄嗟に能力を行使し、電撃を消す。

俺の能力は表向きには『発火能力』のLEVEL3とされているが、  
実際は違う。

俺の能力は『イマジニアチーフメント幻想実現』と俺が名付けている能力で、推定能力はLEVEL5。

その力は、直接『死』に関する事象でさえなければ、可能性が完全に『0』で無い限りどのような事象・力でも実現出来るという極め

てチート極まりない能力なのである。

「えっ！？あ、アンタ一体何の能力なのよ！！！」

「俺か？俺は『発火能力』のLEVEL3だぜ？」

表向きの能力を言うと、御坂美琴は驚き言ってきた。

「アレが発火能力なわけ無いでしょ！！！」

「あー…まあ、そうかもなあ。っと、当麻パス！」

「えっ！いきなりとばっちりが上条さんに！？って、連夜！俺を置いてく…いや、置いて行かないで下さい！！！」

逃走を始めようとする俺を当麻は必死に呼び止める。

「……しょうがねえなあ。今度ファミレス奢ってくれんなら、助けてやるぜ？」

「うっ…！わ、分かった！奢るから助けてくれ！」

「何を揉めてんのよ!!！」

そう言っただけで放たれた電撃は当麻を襲う。

だが、当麻の右手に籠ったトンデモ能力：『幻想殺し（イマジンプレイカー）』によって、その電撃は当麻自身にダメージを当たると無く消え失せた。

「あ、あぶねー」

「おお、じゃあ当麻。交代な？」

「ありがとうございます！と上条さんは精一杯の感謝をするワケなんですよ！」

「感謝より約束だぞ？ファミレスの事？」

そんな話を話しながら、俺は御坂美琴へと振り替える。

「ファミレスのために俺が相手だ！」

「何でファミレスで釣られるのよ！？アンタ私が誰か分かってんの？！」

そう言いつつも、また電撃を放つ。

が、ソレは俺の体に触れる事無く消え失せる。

コレは、詰まる所『電撃が霧散する可能性』を使って、電撃を消しているのだ。

「知ってるさ。第三位『超電磁砲』の御坂美琴ちゃんだろ？」

「へえ。知っててその態度は…ムカつくわね！！」

電撃が効かないと見たのか、次は何だか地面から出た黒いものを集め、黒い剣を作り出す。

「何だそりゃ？」

「砂鉄で作った剣よ？砂鉄が振動してチェーンソーみたいになるから当たったら怪我するかもね」

そんな危険な事をサラリと言う。

(いや、ソレサラリと言える内容じゃないからね！？確実にポトリ行っちゃうからね！？スプラッタな感じになっちゃうからね！？)

「おいおい、俺はまだスプラッタな死体じゃあなりたくねえぞ！」

そう言いながら俺は『高熱を操る可能性』を使い、高温の熱を元に剣を作り出す。

演算の方はこの程度ならば全く負荷にならないから、割と楽だ。

「何よソレ？」

「高温の熱を収束させた剣だぜ？」

(この剣の最高温度は約二千度。砂鉄の溶解度は確か千五百度だった気がするし、いけるだろ?)

「とりあえず行くぜ！！」

俺は御坂と剣を交える。

するとやはり高温のためか砂鉄はドロドロと溶ける。

俺はそのまま砂鉄の剣を切り落とし、御坂に剣を向ける。

「チェックメイト…だろ？」

そう言っと、御坂は悔しそうにしていた。

「……負けたわ……。けど次は絶対勝つんだから!!」

「ツンデレ？」

「違うわよっ!!」

そんな会話をしていたら、急に御坂が思い出したかのように質問をしてきた。

「アンタ名前は？」

「俺か？俺は篝火連夜。で、彼処にいるアイツは上条当麻。呼び方は別にどうでも良いぜ？俺は御坂って呼ぶしな？」

「そう。覚えたわよ。まあ、呼び方は別に良いわよ？」

「ん、オツケー。じゃあな御坂？」

そう言っつて、俺は当麻の所に戻る。

「当麻。終わったぜ？まあ、超電磁砲レールガンとか使われなくて良かったぜ。つと、まあ約束どおりファミレス奢れよ？」

「ありがとうございます！」

そう言っつ当麻と共に俺たちは自らの寮へと走っつて帰っつていっつた…。

## 第一話 プロローグ？（後書き）

アレ？

今回笑える要素が全く無い……。

笑いを入れたい！

そこそこに入れたい！

けど、無理っぽかったら諦める！

ソレが俺！

っとまあ、駄文ですが見てくれると有り難いです。

## 第二話 銀行強盗退治（前書き）

投稿だ！

若干変？

うん！

黒子に変な感じがしなくもない！

とまあ、一人で会話をしてみた。

虚しいねコレ！

感想とか書いてくれると作者は嬉しくなります！

## 第二話 銀行強盗退治

〈三人称視点 side〉

次の日……。

「黒子！」

そう御坂美琴の声が響く。

御坂美琴が呼んでいるのは白井黒子という風紀委員のジャッジメント一七七支部に所属する女性だ。

白井黒子は、御坂美琴のルームメイトであり、後輩であり、『お姉様』と呼び親しんでいる女性だ。

御坂美琴も白井黒子も同様に、常盤台中学という在学条件がLEV E L 3以上というお嬢様学校である。

「何ですか？お姉様？」

「この二人を調べて！」

そう言って、昨日連夜自身から教えてもらった二人の名前を書いた

紙を白井黒子に渡す。

「上条当麻に…篝火連夜？こちらの殿方がどうなさったんですの？」

やはりと言うべきか、篝火という感じは多少分からなかったようで、多少悩んだ後名前をいう。

「いいから調べなさい！」

「……分かりましたわ」

多少だが、いぶしかげに見た後『お姉様のためですの』とかそんな事を思い、言われた通りに書庫バンクで二人の情報を調べ始める。書庫バンクというのは、全生徒の能力やその他諸々が保存されているモノで、風紀委員である白井黒子にはそこにアクセスする権限があった。

「上条当麻という殿方はLEVEL0…篝火連夜という殿方は『発火能力』のLEVEL3と書かれていますの」

「はあ！？一人は私の電撃を右手で消して、篝火連夜の方は電撃を消したり、発火能力のLEVEL4以上の能力だったのよ！？」

そう言うと、白井黒子は思案顔をする。

「おかしいですわね。この二人の殿方はどちらとも能力検査を受けていますの。…そうと考えるなら、篝火連夜という殿方は意図的にLEVELを下げているのではありません？それか、実際は違う能力…とかではありませんの？…けど、この事はやはり本人に聞かなくては分からないと思いますの」

「そうね。今度会った時にでも聞いておくとするわ」

そう言うと、白井黒子は疑問そうに聞いてきた。

「こちらの殿方達は一体誰ですの？」

そう白井黒子は聞いた。

白井黒子は自称『お姉様の露払い』である為、そんな得体の知れない馬の骨…もとい、男性が近付くのはあまり気分的によろしいモノではない。

「ソイツラの片方…篝火連夜の方と昨日戦ったのよ」

「そうでしたの」

） e n d ）

その次の日…。

俺はそんな出来事があったなど露とも知らないワケで、一人で銀行に向かっていた。

「当麻のヤツは居残り受けてんしな…。」

当麻のヤツは今、小萌先生という合法ロリの先生に見えない先生と補修でもしている事だろう。

「はあ…。LEVEL上上げて補助金増やしてもらっかな…」

金を卸しながらそう思った。

今の俺の残額はおよそ30万くらいだ。

「まあ、成り行きに任せるかなー」

そう思っていたら、強盗が発砲した。

「おい！金を出せ！」

「ハア……。このバカ共が……」

俺は金を詰めさせている三人組を見ながらそう呟く。  
そのまま俺はソイツラの近くに移動する。

「テメエラさあ？銀行強盗とかマジ恥知らず過ぎんだろ？」

「んだとテメエ！！ブツ殺すぞ！俺はLEVEL3の発火能力者なんだぞ！！」

そう能力を誇示してくるバカに俺は溜め息を吐く。

「テメエ！！嘗めてやがるのか！！」

「力を誇示しか出来ねえのかよ？ダッセエヤツだな……」

そう言ってる間に俺は『空間を隔離できる可能性』で、周りの人達に被害が及ばないようにする。

「ブツ殺す！！」

「お、お客様！！」

そう言い、俺に銃を向けてくるが、それは当たることは無かった。なぜなら、銃を構えた瞬間に俺の足がソイツの腕に蹴りを食らわしていたからだ。

「まあ、心配しないでくださいよ。直ぐに終わりますから」

そう言い、俺を心配してくれた銀行の職員に微笑む。すると、職員の女性は何故か頬を赤く染めていた。

「テ、テメエ……。おい！お前等殺れ！！」

その瞬間、横にいた仲間が俺を囲むように動き、殴り掛かってくる。

「立ち振舞いが隙だらけだ。俺に勝ちてエなら武術でも憶えるんだな！」

そう言い、まず前にいたデブの喉元に蹴りを差し込むように入れ、そのまま流れるように後ろ回し蹴りを不良に食らわす。すると、その不良は二三回転した後、ベシヤツという音と共に地に

伏せ、沈黙した。

「どうだ？まだやるか？」

「クツ、クソツ！！憶えてやがれ！！」

そう言い、その男はシャッターを破壊し、逃走を始める。

「逃がさねえよ！！」

俺は即座に『煙が排煙される可能性』を使い、煙を消し飛ばす。

「何なんだよテメエ！？」

「何だろうなア？そんな事態々今から捕まるヤツに教えるかよ！！」

俺は更に『電撃を発生させる可能性』を使い、その男を感電させる。三つの併用で頭が痛んだが、仕方がないだろう。

「グアツ！！」

そしてその男は、黒焦げになって崩れ落ちた。  
それと同時に俺は三つの演算を止める。

「ふーっ。あつたまいてえなア……」

そう言いながら、ソイツラを一ヶ所に固め、銀行の職員に縄を貰い、捕縛する。

(つてか、何で縄持ってたんだよ……)

そう思い、手を払っていたら、急に後ろから声を掛けられた。

「シヤッジメン風紀委員ですの。失礼ですけど、貴方の名前を教えていただけますの？」

「ん？ああ、良いぜ？俺は篝火連夜だ」

「貴方がお姉様の言っていた殿方ですの……お姉様にはちよつかい出させませんわよ！……ところで！あれは貴方がやったんですの？」

「お姉様？ん…ああ、まあ其処の奴らなら俺が片付けたぜ？問題でもあつたか？」

『お姉様』という単語に当てはまる人物には全く身に覚えが無かったが、其処を掘り下げても余計時間が掛かるだけと判断し、話を進める。

「問題大有りですの。見たところ貴方は一般人のようなのですから、多少腕に覚えがあつたとしても、危険な真似はしないで頂きたいものですわね。それに！もしも他の人に危害があつた場合はどうするんですの？」

「いや、それは無いぜ？空間を隔離したから、核爆弾が当たつたつて傷一つつかねえよ」

「貴方は『発火能力』のLEVEL3ではありませんの？………まあ、良いですわ。それも含めて、貴方は重要参考人として風紀委員第一七七支部まで着いてきてもらいますの」

そう言つてその女の子は俺の腕を掴む。

「まあ、話くらいなら良いけどさ。君の名前も教えてくれないか？」

「申し遅れましたわね。わたくしは白井黒子と申しますの」

「白井さんね。よろしく、白井さん」

「よろしくお願ひしますの」

俺達は挨拶し、白井さんに連れられて行くと、見知った顔があった。

## 第二話 銀行強盗退治（後書き）

頑張れ俺！

負けるな俺！

きっと文才は書いてるうちに良くなるぞ！

駄文はいつか治るのさ！

とか言ってみます。

次も見えてくれると有り難いです！

第三話 お話的モノ！（前書き）

二話の続きみたいな感じですよ。

超電磁砲の話に介入させようかな？  
グラビトン事件の時だけ！

ってか、黒子がなんか優しめ？  
もっと無下にしろうなんだけどな！。

### 第三話 お話のモノ！

「ア、アンタは！」

「おお、御坂じゃねえか」

「勝負しなさい！！」

「んー、また今度な？」

そうやってそのまま流す。  
その近くには、花が頭に咲いてる女の子と、長めの黒髪の女の子がいた。

「あの…白井さん。そちらの人は？」

「こちらの殿方は先程の強盗を捕獲した重要参考人ですの。篝火連夜というらしいんですの」

そう言うと、花の子と黒髪の子が自己紹介を始めた。

「初めまして。私は初春飾利です」

「んー、えーとお花屋さん？」

頭を見てふと思いつつ。

(アレもう売り出せるんじゃないかな?)

「違います！名前で読んでくださいよー！」

「ゴメンゴメン。初春ちゃんね？よろしく。俺はさっき言ったけど  
篝火連夜。呼び方はどうでも構わないよ？」

そう言って、微笑む。

「私は佐天涙子だよ。よろしくね？」

「よろしく。佐天さん。さっきも言ったけど呼び方はどうでも構わ  
ないよ」

そう挨拶をし、そのまま俺達は第一七七支部へと向かう。

「なんかゴメン。楽しんでたところをこんな事で邪魔しちゃって…」

「いえいえ、全然良いですよ！此方こそ時間取らせてすみません」

と、まあ初春ちゃんが謙虚な答えを返してくれたお陰で、大分心が楽になった。

そして、第一七七支部に着き……………。

「まず聞かせてもらいますの。貴方があの犯人と戦っていた原因はなんですか？」

「あのバカ共が発砲したからだ。まあ、発砲しなくても銀行強盗なんて目の前でされたら捕まえるしかねえだろ？」

「全くお姉様とあまり変わらない殿方ですね…」

そう言い、白井さんは盛大な溜め息を吐いた。

「ちょっと黒子！それどついつ意味よ！！」

「こちらの殿方もお姉様も事件に手を突っ込みたがるといふ事ですの」

そう言って、また溜め息を吐く。

（へ？今なんて言った…？）

「え…？は？え！？………御坂？お姉様？」

「…そうよ。悪い？」

「い、いや。悪くはねえよ」

話が止まると、白井さんが話を再開する。

「…では貴方の能力について聞きますの」

「おや、もう事件の方は良いのか？」

「良いんですの。貴方は先程『空間を隔離した』と言いましたが、貴方の能力は一体なんですか？」

「フム……。もうバラすしかねえよな？」

そう言うと、白井さんは頷いていた。

他の三人も頷き、御坂は何故か期待するような目で見ていた。

「仕方ねえ。コレまだ当麻と我が幼なじみにしか言ってねえんだけどなア……」

そう呟きながらも俺は自らの能力を暴露し始める。

「俺の能力は『イマジニアチーフメント幻想実現』っていうんだ」

「どんな能力なのよ？」

御坂が期待を込めた目で見る。

「ああ。俺の力は可能性が完全に『0』で無ければ、直接『死』に  
関することで無ければどんな事も実現可能っていう力だな。簡単に  
言えば『可能性を自在に操る』と言ったところか」

「随分デタラメな能力ですね…」

そう言い、白井さんは驚いていた。  
御坂は目をキラキラしていたが。

「スゴいですね！尊敬しちゃいます！」

「おーおー、可愛いなあ初春ちゃん。アツハツハツハツハ！」

そう言つて、初春ちゃんの頭を撫でる。

「勝負よ！…！」

「アツハツハツハツハ！また今度なー」

勝負を仕掛けてきた御坂も軽くあしらう。

「それはどのくらいの事が可能ですの？」

「うーん。学者的に完全に不可能じゃなければ：かな。天文学的數字でも大丈夫だよ？まあ欠点と言えば、規模が大きくなれば成る程頭に負荷が掛かることかな？」

「アハハ…。スゴいですね」

そう言い、佐天さんは苦笑いしていた。

「アハハ。俺だって色々アレな力だとは思ってるさ」

そう言っつて俺も笑っつておいた。

「まあ、この世界に完全に不可能な事なんて数えるくらいしか無いし、ほぼ全て出来ると思っつてくれれば良いよ？」

「なら、何故能力を偽っつていたんですの？」

「こんな能力があるつて知られたら、学者の実験動物モルモットにされちまうだろ？俺はそれが嫌なんだ。だから、お願いだからこの事は話さないでくれないかな？いずれか時が来たら話すと思っつからさ？」

そう言うと、四人とも頷いてくれた。

「ありがとう四人とも。大好きだ！」

そう言って、本日最大の笑みを放つ（本人は気付いてない）。

「」「」「へっ!?!?」「」「」

「全く節操が無いのですのね」

白井さんがそう言い、俺は自分が何を言ったかを把握した。

「あっ!?!?ちよっ!?!?そんな意味じゃなくて!?!?」

「言い訳が白々しいですの」

「ち、違っ!白井さん違っって!?!?」

「違っなら、なんですの?」

俺は必死に白井さんに弁解を始める。

「友達として好きって意味だっけ!?別にそんな意味じゃないぞ!」

「ほう。そうなんですの?」

「ちよっ!?!信じてくれよ白井さん!!!」

そうやって弁解する事三十分……。

「まあ、分かりましたわ」

「や、やっと分かってくれたんだね白井さん……」

俺はやっとの事で白井さんを弁解でき、安心する。

「ふう……。なんか疲れた……」

「アンタがあんな事いきなり言うからよ」

「そうですね!」

「私もそう思いますよ?」

上から御坂、佐天さん、初春ちゃんの順だ。

「うん、ゴメン…。言い回しとか考えとくべきだった……」

「全く節操無いか身近な人に言われた事無いんですの?」

「うつ…。俺の周りには不幸体質でフラグメイカーのヤツがいるから俺なんて全然なんだよ……」

そう言うと、白井さんに盛大な溜め息を吐かれた。

「全く貴方の周りはどうなってるんですの?」

「アロハシャツのにやーにやー言ってる妹に手を出した可能性があるメイド好きのシスコン軍曹に、Mでロリコンでオタクでエセ関西

弁を操る変態に、不幸体質のフラグメイカーに、合法ロリの先生……かな」

「それは……ある意味この程度で治まったのが奇跡と言えますの……」

そう言っつて、俺は白井さんに同情された。周りをみると、他の三人は引き吊った苦笑いをしていた。

「そうだろ？だから、俺は至って平凡で健全な高校生に育ったと思うんだよ」

「平凡では無いと思うわよ？」

「なにい！？御坂そりゃ酷くね！？」

「私も平凡では無いと思います」

「私も平凡じゃないと思うかな」

上から初春ちゃん、佐天さんの順だ。

三人とも同意を示したので、俺は若干……てか、かなり落ち込む。

「そんなバカな…。俺は既にあの変人奇人グループの同類とかして  
いたのか…」

「いや、そこまで酷くは無いですの」

「センキューー白井さん！」

そう言うと、白井さんは「別に構いませんわ」とまあ、お嬢様な感  
じの口調で返事を返してきた。

(あれ?なんか優しい?)

「まあ、確かに其処までおかしくは無いわね」

「其処まででは無いかな」

「其処までおかしい人では無いと思いますよ」

上から御坂、佐天さん、初春ちゃんの順で励ましてくれた。

(あまりの優しさに心が染みまくりそうだよ……)

「ありがとう！……と、ああもうこんな時間か……」

周りを見ると、外は既に暗くなっていた。

「「あつ！」」

常警台は既に門限の時間なのか、二人は焦ったようにしていた。

「門限か？」

「そうですね！ああ、どうしましょう！寮監殿に怒られてしまいますわー！」

「マジかよ……。じゃあ、仕方がねえ……。怒られないようにして置いてやるよ」

俺は『御坂&白井さんが寮監に怒られない可能性』を100%に上げる。

こういうのにも使えるから、結構多様性が聞く。

「何をしたんですの？」

「寮監に怒られない可能性を100%にあげておいたんだよ」

「ありがとうございます！感謝するわ」

「ありがとうございますの」

そう言って、二人は感謝してきた。

「良いよ感謝は。今日は面白かったしそれで十分だ」

とか会話をし、この後四人とメルアドやらを交換し、帰路に着いた。帰った後に携帯を見ると、メールが二人から来ており、二人とも寮監に怒られずに済んだという旨が書いてあったのだった…。

第三話 お話的モノ！（後書き）

タイトルが…。

俺にはネーミングセンスは存在しないんだ！  
だってキャラの名前だってこんなんだし！

と、まあ、次回も見てくださいと嬉しいです！

## 第四話 とある平日（前書き）

グラビトンの前の平日みたいな感じですよ！

なんたることだ…。

吹寄制理と絹旗最愛の話し方が中々分かりにくい…。

絹旗が超超いつてるだけになってしまったじゃねえかこのやろっ！  
更に吹寄も喋り方が変だ！

うーん、頑張らなくては…。

## 第四話 とある平日

次の日…。

俺は、目覚ましという呪縛の鐘に起こされず、清々しい朝を迎えた。

「…………ふあ…………。久し振りに清々しい朝だねー」

そう言つて、ふと時計を見る。

「……………へ？」

其処には、デジタル時計が光を失い沈黙していた。  
ようは……………電池切れ……………。

「…………なつ、何だとオオオオ!?」

俺は直ぐ様準備を始め、飯を食い、速攻で準備をする。  
そしてふと携帯を開き、時間を見る。

…………残り10分…………。  
それをみた瞬間、横の部屋から大声が響いた。

『不幸だーーーーー!!!』

どうやら当麻も今起きたらしい。

「だが、俺は待たん！全力で行かんと遅刻だしな！」

そう独り言を言い、全力で走り出す。

そして、俺はギリギリ2分前に教室へと辿り着いた。

「…ふう。ギリギリ間に合ったか…」

「レンちゃん遅いにゃー」

「レンちゃんやん。なんや、今日は遅いんやな？」

「デジタル時計の電池が切れちゃってな。まあ、寝坊だよ寝坊！」

そう言いつつ、俺は鞆を置く。

「やつ。吹寄ちゃん。おはよう」

「おはよう篝火」

俺は横の吹寄に挨拶をする。

「遅刻するとかは流石にアレだからな」

「そうね。上条当麻のやつはまた遅刻？」

軽く呆れたように上条の席を指差す。

「ああ。俺が出る時に『不幸だー！』って叫んでたしな？」

「…はあ。上条当麻は毎回そうね。篝火！あの馬鹿本当に何とか出来ないの！！」

「んー。あれが当麻の性格だしなー。死ななきゃ治らないんじゃないかな  
いか？」

そう言っていたら、推定身長135？…合法ロリの月詠小萌先生が入ってきた。

アレでヘビースモーカー、更に飲んだくれだといふのだから恐ろしい。

「あれ？上条ちゃんはお休みですか？」

「当麻は遅刻ですよ、小萌先生」

「あ！そうなんですかー」

そう言っていると勢いよく扉が開く。

「おっくれましたあああ！！」

当麻は其処だけ炎天下のように汗をダラダラと流しながら叫び、その後息も絶え絶えに席に着いた。

(アイツどんな不幸に巻き込まれたらあんなに疲れるんだよ……)

「さて皆さん。今日は能力検査なのです。頑張ってくださいね？」

「あ、そう言えば今日は能力検査だったか。久し振りだな…今回は

「どうしようかね?」

「篝火。貴様は毎回手を抜いているように見えるんだけどまともにする気は無いの?」

「ん?ああ、そうか?大丈夫。今日はLEVEL4くらいまで力出す気だし」

流石にLEVEL5になるのは面倒だからな?

「真剣にやりなさい」

「んー。まあ、気分だなソレは。第一本質的には違うんだからな」

「どういう意味よ?」

「んー。さてどういう意味かね?」

とか、軽く会話をし、能力検査の準備を始めるために『発火能力』をLEVEL4程度に固定する。

「さあて、久し振りに上げるか。補助金欲しいし」

「どんな理由よ……」

そんな事を言いつつ、俺は能力検査をしに向かっていった……。

そして、検査が終わり……。

「LEVEL4になったねえ。っと、当麻！約束のファミレスだ！」

「おお。分かったぜ。行くか？」

そう言って、ファミレスに移動し……。

「ご注文はお決まりですか？」

そう言うと、当麻は適当な安めの料理を注文した。

そして俺は……

「ん、じゃあ、このデザートメニュー全部」

「はい？」

二人は聞き取れなかったのか疑問そうな声を上げていた。

「だから、ここに書いてあるデザートメニュー全部一個ずつで」

「え！？ちよっ！？連夜さん！なんでそんなに頼むんですか！？それに何でデザートばかり！？あなたは女の子ですか！？」

そう言う当麻の言葉に俺は多少カチンと来た。

「男がデザート食べてワリイのかよ？男がデザート食べたらダメな理由を言ってみろオ！！言え！すぐ言え！至急的速やかに言えエ！」

「あ、その、すいませんでしたあ！！デザート食べても全然構わないです！！寧ろ是非食べてください！！」

そう言うて当麻は土下座をし、全力で謝った。

「おっと、見苦しいところを見せてしまってすまなかったね？先程も言った通り、俺はデザート全種類一個ずつでよろしく頼めるかな？」

「あっ！はっ、はい！分かりました！少々お待ちくださいませ！」

そう言って、ウエイトレスはそそくさと去っていった。

そして、しばらく経ち……。

「お待たせいたしました。ご注文は全て揃いましたでしょうか？」

「ああ、ありがとう。全て揃っているよ」

「それでは失礼いたします」

そう言ってウエイトレスは去り、俺はデザートを食べ始める。

「うめー」

「なんかえらく幸せそうですね。上条さんは財布の中の樋口一葉女史と野口英世さんがレジの中へと引越してしまおうと思うだけで、悲しみにうちひしがれてしまいそうですねよ」

そう言い、当麻は財布の中を悲しそうに見ていた。

「あひらめるんひゃな」

口をモゴモゴしながら言う。

「ふ、不幸だ……………」

「……………じゃあ御坂と戦り合つか？」

「いえいえ！是非ともソレは上条さんは遠慮したいワケなんですよ！……って、何で携帯を開いてるのですか！？」

携帯を開き、当麻を見ると当麻は焦りながら俺を見ていた。

「いや、御坂を呼び出そうと？」



(おいおい、ソレは色々と不味いだろ……。コイツラ何考えてんだ?)

「おいおい、テメエラさあ？何中学生に際どい事言ってるやがんの？ロリコンですか気持ち悪いんですよコノヤロー」

「ああん？何だよテメー。女の前だからってカッコつけてんじゃねえよボケ！」

「ハイハイ、勝手に言ってるやあ？てかさあ、一人でナンパとかすんなら俺は別になんとも思わねーぜ？けどさあ、三人で女の子一人困むってどうだよ？恥知らずなのかテメーら？マジヘタレだろ？」

「この野郎が！！粹がりやがって！！」

そう言って、その三人は攻撃を仕掛けてくる。

「ウゼエー！！」

俺は前のヤツの喉元に蹴りを入れ、更に横にいたヤツの関節を捻り倒す。

「クソがッ!!」

そう言つて最後の一人はナイフを取り出し、差し掛かってくる。

「やれやれ、ナイフかよ……。シッ……!!」

俺はナイフを持ったヤツの手元を蹴り、ナイフを上には飛ばす。

「なっ!?!」

「沈め!!」

俺はそのままソイツの右首等へんから斜めにおろすように蹴る。

「グヘッ!?!」

「全く馬鹿が……。」「

そう吐き捨て、俺はその中学生を見る。

「怪我アねえか？」

「あ、超大丈夫です」

「うんうん。なら良かったぜ。其処にいるバカみたいなヤツだっているんだからさ？なるべく一人でいないようにしろよ？」

「超どうでもいいですけどまあ分かりました。ってか、あなた誰ですか？超気になるんですけど？」

(あれ？コレってもしかして俺この馬鹿共の仲間とか思われてたりする？)

「言つとくが、この馬鹿共の仲間では無いからな？まあ、俺は篝火連夜だ。よろしくな」

「私は絹旗最愛です。超よろしくです」

とか言う会話をし、俺は当麻の元に戻っていった。

戻ったら当麻は、ファミレスの代金が6520円もしたとか言っ  
てかなり落ち込んでいたのだった…。

## 第四話 とある平日（後書き）

次はグラビトン？

頑張ってマトモに書きたいです！

次も見てくださいと有り難いです！

ついでに言うと、絹旗を出したのは「アイテム」内の誰かと面識が欲しかったからです！

## 第五話 グラビトン（前書き）

少しずつ原作キャラと面識をあわしたいぞ！！

と、言うわけで今回は原作のグラビトンとは多少内容を変えました！

p s ・呼び方が間違えてたので変更しました！

## 第五話　ケレビトン

しばらく経ち……。

今日俺は当麻と共につろちよろしていた。

「なあ当麻？服買いてえんだけど、お前はどつする？」

「服か？まあ良いぜ？行くか？」

ゲーセンやらを回り、暇になった俺は久し振りに服を買いに行こうとふと思い、当麻に言った。

「てか、当麻？お前服買える金あんの？」

「……ありませんでした……。良いよ！俺はウインドウショッピングでもしてるよ！」

「ええ？一人でウインドウショッピングだと？」

「そうですねよ！悪いんですか！？」

「いや、悪くは無いが……虚しくないか？」

「……凄く虚しいです……」

そう言って当麻は落ち込んでいた。

「まあ、金も今は余裕あるし二、三着なら奢るぜ？」

前回LEVEL4まで上がった事で、俺の補助金の額はかなり上がっていた。

そのお陰で、金の余裕がだいぶ出来ていた。

「連夜…本当か！？ありがとうございます！！連夜のあまりの懐の大きさに上条さんは感涙しそうです！」

「まあ、この前デザート喰いまくったしな？今回は俺が奢るぜ」

とか話しつつ俺らは移動を始める。

今から向かうのはセブンスミストという服屋みたいな場所だ。

……で、歩き始めた俺たちだったんだが……。

「なあってこうなのかなアー？」

「ふ、不幸だ……」

今日に限って俺達は妙に不良に絡まれたり、不良に絡まれてるヤツを発見していた。

「何がだゴラアアアア！！！」

「ああ、うるせえなあ。邪魔だよテメー」

「ガハアツ！！！」

「ハイハイ、コレで倒した不良の合計数35人だな」

「よく数えてるな……」

俺達はまだ半分ぐらいしか進んでないにも関わらず、不良にエンカウトしまくっていた。

「コレが不幸上条パワーか!？」

「ちよっ!?!そんな嫌な名前をつけないでください!?!」

そう言つてるとまた路地裏で五人くらいの男に女の子二人が絡まれているのが目に入る。

「……………またかよ。行くぞ当麻」

「……………またか…。不幸だ…」

そう言いつつ、路地裏に移動し不良共に言う。

「お前らさあ?何女の子を五人で囲んでんだよ?恥ずかしくねえのかよ?なあ、どうだよ?そこらへんはよお?」

「連夜の言う通りだぜ。お前ら中学生相手になにそんな人数で囲んでんだよ。テメーらロリコンかよ」

「なんだ?女の前だからってカツコつけてんじゃねえよ!?!テメーら殺れ!?!」

そうその群れのリーダーらしきヤツが言うと、その横にいた不良共が襲い掛かってきた。

「おいおい、殺れっつのは物騒じゃねえか？なあおい？」

そう言いながらも襲い掛かってくる敵を避けつつ、関節を外したり、膝を蹴り皿を割る。

「ガアアアアア！？」

「連夜。そりゃ酷くねえか？足再起不能になるぞ？」

「ああ、大丈夫。この手のヤツはゴキブリ並みに生命力が高いからさ？……っと、シッ……！」

「ゴキブリって…………」

そう言いつつも最後のヤツに蹴りを食らわす。

「っと、大丈夫だったか？………ってオイ！？またか絹旗！？」

其処には、この前助けた絹旗最愛と金髪の誰かがいた。

「あ、超久し振りですね」

「ん？結局、絹旗知ってるの？結局、誰か教えて欲しいんだけど」

「連夜、上条さんも教えて欲しいんですけど!？」

俺は取り敢えず自己紹介を始めることにした。

「俺は篝火連夜だ。呼び方は別に何でも良いぜ？で、横のコイツが  
上条当麻」

「よろしくな!」

「私は絹旗最愛です。超よろしくです」

「結局、私の名前はフレンドよ」

軽く挨拶をした後、俺は少し理由を聞いた。

「そついえばお前らどうしたんだ？また不良に引っ掛かるとか」

「あ、そうです！今から超セブンスミストに行こうとしてたんですよー！」

「けど不良に絡まれた訳ね、結局」

「何だ？お前らもセブンスミストに行くのか？」

（気持ちワリイくらいの偶然だな…）

とか思いながら、話を進める。

「超偶然ですね」

「まあ、確かにそつだな」

とか話す間に結局共に向かうことになり……

「超不良に絡まれるんですが？」

「いつまでたつても辿り着けない訳よね、結局」

「しつこいんじゃないアア！」

そして、また不良を倒し続ける。

「ふ、不幸だああ！！！」

「上条不幸パワー恐るべし！！！」

「ちよっ！？その名前は色々アレだと上条さんは思うワケなんですよー！」

そう言いながらも更に不良を蹴散らしていき、ようやく不良の波が終わる。

「異常なくらい絡まれた訳よね結局」

「超ウザいくらい来ましたね」

「やっと終わったか…」

そう言いながら歩いていく途中で小さな女の子に会い、その子もセブンスミストに行くようだったので合流し更に進んでいく。  
そしてようやく着き……

「や、やっと着いた……」

「超疲れたんですけど」

「まあ、あんだけ不良に絡まれたらなあ……」

そんな話をしつつ、俺達はメルアドやらを交換し、別行動を始める。  
そして、少し服を選び始めたくらいで放送が鳴った。

『お客様にご連絡申し上げます。店内で電気系統の故障が発生したため、真に勝手ながら本日の営業を終了させていただきます。係員がお出口までご案内を』

「うおい！マジかよ！？当麻今日不幸すぎねえか！？」

（しかし、電気系統の故障？それにしてもあまり変わらないような  
……）

「まさか…また事件とか？さすがにソレはねえだろ？」

そう独り言を言っていたら、御坂と上条が走っていつてるのが見えた。

「追い掛けるか…」

そう言いつつ追い掛けると、さっきの少女を発見した。

「アレは…。ツチ!？」

その少女が持っていた人形………ソレが中心に引き込まれるように縮こまっていく。

御坂はソレを見て、レールガンを撃とうとしたが、コインを落とす失敗した。

「当麻！！俺がアレを抑える！お前は出来る限り回りに被害が起き

ないようにしてくれ！」

「分かった！！」

俺は直ぐ様少女の腕を掴み当麻に投げる。

「空間隔離！」

俺は初春達を後ろに引き入れ、空間を隔離する。

その瞬間に、轟音が響き渡り、回りを爆発と爆風が駆け抜ける。

「当麻。そっちは怪我ねえか？」

「ああ、大丈夫だ」

「……………あ！こんな事するんじゃないかってぬいぐるみを隔離すりゃよかったー！」

思い出したかのように俺は叫ぶ。

「…アンタそんな手が有るならさっさとすれば良かったじゃない！」

「！」

「仕方ねえだろ！急いでたんだからよ！御坂だってコイン落としてたじゃねえか！」

「…うつ！あ、アレは仕方が無かったのよ！」

とかケンカ？をし、この後テレポートして来た黒子と話し、俺達は帰路に着いた。

……結局服は買えなかったが……。

## 第五話　ケラビトン（後書き）

今回はフレンドが登場しました！

滝壺らへんにしたかったが、中々に書き方が分からず……。

いや、麦のんを一番出したかったワケだが…。

麦のんとはどうしたら会えるのかな…？

と、まあ次も見てくださいとありがたいです！

つてか、メインヒロインどうしよ…。

希望とかありますか？

第六話 幻想御手（前書き）

今回は短めです。

そして、幻想御手まで多少内容を変えてしまったぜ！  
先頭には参加しませんか…。

## 第六話 幻想御手

最近、<sup>レベルアップ</sup>幻想御手とか言うヤツが流出してるらしい。  
らしい……と言うのは、俺自身はそういうモノの現物を見てないワケであって、コレを知っている理由は現在当麻と運悪く（まあいつもだか）その使用者と鉢合わせたからだ。

「俺はLEVEL3の『風使い』だ！テメーらなんぞ敵じゃねえんだよ！！幻想御手を使った俺に勝てるヤツなんかいねえんだよ！！」

「ハイハイそうかよ。さっさと黙っとけ……や！」

「ゴハツ！？」

そう言って、<sup>レベルアップ</sup>幻想御手を使用したであろう男が崩れ落ちる。

「なあ連夜？コイツラが言ってたレベルアップ？だっけか？何なんだろうな？」

「都市伝説だよ都市伝説。使っただけでLEVELが上昇するとか何とからしいぜ？……当麻は使って見たかったりするか？」

俺がそう聞くと、当麻は少し考え始めた。

「うーん……。まあ俺は使わねえかな。そんなインチキくせえモンはあんまり使いたくねえし、それにこの幻想殺し（イマジンプレイカー）が有るから異能の力は使えないだろうしな？」

「まあそうだな。取り敢えず白井さんにでもどうなってるか聞くとするか」

「白井さん？」

そう言う当麻を他所に俺は白井さんに電話をかける。

プルルルル……

ガチャッ

「もしもし。白井さんですかー？」

『もしもし。そうですね。連夜さん一体どうしたんですの？』

「さつきから幻想御手とかいうのを使ったヤツが暴れてんの倒して  
ただけど、幻想御手ってなに？」

『それは私達が知りたいんです。連夜さん。もし幻想御手の本体  
が手に入ったら、ご連絡いただけませんか？』

「ん、まあ良いぜ？白井さんの頼みとありゃあ断れねえしな。……  
それに当麻がいるから結局不幸に巻き込まれるしな………」

そう言いつつ俺は当麻を見る。

「うわああああ！？」

当麻は何故か犬に追いかけていた。

「……………はあ……………」

『どっつしたんですの？』

「我が親友のあまりの不幸さに驚きを隠せなくてな……………」

そう言っただけでまた当麻を見る。

次は、何故か増えた犬に囲まれていた。

「ちょっと、連夜さん！！助けてください！！！」

『……？誰か叫んでいる気がしますので、私は失礼いたしますの』

「ん。ああ、白井さん。また今度ね？」

そう言っただけで電話を切った俺は、直ぐ様当麻の助けに入った。

「大丈夫か当麻？」

「れ、連夜さん！ありがとうございます！！！」

犬に囲まれていた当麻を助け、俺達は幻想御手の本体を探すことにした。

「なあ連夜？さっき言っただけで白井さんって誰なんだ？」

「ああ、風紀委員の女の子だよ」

「……………畜生！！！モテない上条さんを他所に連夜さんは何でモテるんですか！！裏切りですか！？」

「……………なに言ってるんだか。お前の思ってるような感じでは無いからな。第一俺はモテないからな？」

「嘘だッ！！！」

とか話しつつも俺達は幻想御手レベルアップバーの本体を持つてるヤツを探し始めた。

「暴れてるヤツボコリまくったけど、本体持った奴いねえなア？」

「なんかそういう取引してる所じゃないとダメなんじゃないか？」

暴れてるヤツは本当に多く、ソレを片っ端からボコっていつていた。  
幻想御手レベルアップバーについて分かったことはただ一つ。  
音楽ファイルだという事だけだった。

「このさい現物じゃなくても情報だけで良いかね？」

「ちゅっ？良いと思っせ？」

そう言っつて俺はまた電話をかける。

「もしもし。白井さんですかー？」

『はい。そうですよ。連夜さん、本体が手に入りましたの？』

「いや、本体は手に入ってないが情報は手に入れたよ。幻想御手は  
レベルアップ  
音楽ファイルらしい」

『……それは本当ですよ？だとしたら、何で能力が上がるんですの？』

「分からないが多分共感覚みたいなモノだと思うよ。耳から入れた情報で色んな感覚を共有させれば音楽ファイルだったとしても、それくらいは可能だろ？」

『確かにそうですね……。分かりました。ありがとうございますの』

「いや、構わないぜ。頑張ってくれな？」

『はいですの!』

そう言っつて俺は電話を切った。

「なあ当麻?今からどうするよ?」

「うーん。もう結構な時間みたいだしな…」

現在の時刻は夜8時…。

「仕方ねえなア。帰るとするか?」

「そうだな」

とか言っつて帰っていると、ふと何かに見られている……いや、撮られてる気がする。

俺は後ろに振り向くがそこには機械しかなかった。だが、俺はその機械に向け一言『盗撮してるヤツ。気になるなら、貴様から来るがいい』と口パクしておいた。

「さて、気のせいかもしれない……。楽しみだねえ」

そう言いながら俺は帰路に着いた……。

第六話 幻想御手（後書き）

さて、言い訳はせん！

ってか確かアレイスターってたくさん盗撮メカ持ってましたよね？

次も見てくださいとありがたいです！

今さらながらのキャラ紹介！（前書き）

忘れてたぞキャラ紹介！

そして前回間違えてたぞ「戦闘」という漢字を！

## 今さらながらのキャラ紹介！

キャラ紹介忘れてたよ！  
っつーことで、キャラ紹介です！

名前 篝火連夜かがりび

身長 178？

体重 62？

見た目 簡単に言えば赤髪の垣根帝督みたいな髪型。だが襟足はもう少し長く、分け目はもっとはっきりしている。顔は一言で言えばイケメン。だがどちらかと言えば中性的な方で、女装なども似合う。

体型 体は引き締まっているが、見た目からまんまマッチョと言っただけではなく、やせマッチョな感じ。

当麻と同じ高校の同じ学年。性格は、基本的に困った人を無視できないお人好し。だが誰にでも優しいワケでは無く、自らに害なす者、敵対する者には容赦しない。戦い方は基本的に実戦向きで、「クラヴ・

マガ」を取り入れた形となっている。

天然のフラグメイカー。

たまに爆弾発言をする。

幼馴染みは結標淡希だが違う高校のため最近会えていない。

能力説明

「幻想実現」

可能性が0じゃない限り全ての事象を実現させるチート能力。形として見えない可能性だけの面でも実現可能で、実質上で全ての能力・魔術を使う事が可能。

本質的には『可能性を自在に操る』だが、基本的に連夜は可能性を100%にするだけしかない。

今さらながらのキャラ紹介！（後書き）

べ、別に結標淡希と仲良くなる術が思いつかなかったとかそんな理由じゃ無いんだからねっ！（ツンデレ風）

ハイ色々乙ツスね！

本編だつて書きますよ！

今日中に…書けるかなア？

と、まあ次も見てくれるとありがたいです！

第七話 暗部（前書き）

追加！

連夜の特技

『料理』 『ギター』

微妙な追加だなオイ！

つてかギター使う余地あんの！？  
無いだろ！

次から原作突入だ！！

## 第七話 暗部

次の日、俺は目覚ましという呪縛の鐘に起こされ、眠たい瞼を擦りながらも料理を作り、食事を取っていた。

「ふあゝ……やっぱりねみい……」

そう言いながらも食事を取り終わり、学校に向かう準備をしていると、インターホンがなった。

「なんだ？まだ朝はええつてのに……」

現在時刻7時。

いつもならそんな時間にチャイムを鳴らすヤツなどいる筈も無かった。

「全く誰だ？」

そう言いつつも俺は扉を開く。

すると其処には土御門が立っていた。

「土御門か。朝早くから一体どうしたんだ？」

「レンちゃんと一緒にできてきて欲しい所があるんだにゃー」

そう言う土御門の口調はいつもと変わっていなかったが、真剣な感じが俺に伝わってきた。

「ん。分かった。良いぜ、行くとするか」

「じゃあ、ついてきてにゃー」

そう言うって土御門の後ろに大人しく着いていき……

「あれ？淡希じゃん」

「連夜。久しぶりね」

俺は何故か幼馴染みの結標淡希の元に連れてこられていた。

「知り合いだったんだにゃー？」

「そつそ。淡希は幼馴染みでな。確か霧ヶ丘女学院にいつてるんだっけ？」

「そつよ。で、土御門と来たって事はやっぱりあの能力バレたの？」

「ああ、多分な。まあ、こつちに来て良くバレなくてすんだよな。  
……能力使つといたからだけど」

「まあ、それもそつね」

そう言うと、俺は淡希の能力の『座標移動』によってワケわからん場所に移動された。

「……何処だココ？」

そう言いつつ進んでいき、しばらくすると男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見えるという奇妙な緑色の手術衣を着て、赤い液体に満たされた巨大な円筒器に逆さまで浸かっている人間がいた。

「誰テメー？つてかテメーが呼んだんだよな？」

「そつだ。私が篝火連夜、お前を呼んだのだ。お前はアンダーライ  
ン……ナノマシンが見えていたのか？」

「え？なにソレ？ナノマシン？ンなちつちゃいモン見えるわけない  
だろ？見られてる気配はしたんだけどな？ってか、あの掃除型ロボ  
ットにでも仕組んでるんだと思つてただけど？」

「……………呼ばなければ良かった…。まさかただの勘違いだとはな……………」

そう言つてる逆さま男の前で俺はあまりの恥ずかしさに悶えていた。

「勘違いとかマジかよ！？ウワツ、はずかしっ！ちよっ！無かつた  
ことに！」

「無かつたことには出来ないな。仕方ない。お前を観察し、その能  
力を図ろうと思つたが致し方ないな。お前のその能力は「原石」な  
のか？」

「そつそ。確かに原石だぜ。まあ、貴様らが今まで気付かなかつた  
のも仕方無いと思つぜ？貴様らみたいな奴らに見つからない可能  
性を上げといたからな？」

そう言うと、その逆さま男は「そうか」と言い、少し間を開けた後に一度自己紹介をしてきた。

「言い忘れていたな。私はアレイスター・クロウリーだ。お前の能力は大体把握できているが、厳密に教えてもらおうか？」

「良いぜ。俺の能力は簡単に言えば『可能性を自在に操る能力』だが、少し詳しく言うなら、可能性が完全に0じゃないならどんな事象でも実現可能なんだ。それは俺単体が可能かどうかでは無く、世界全体から見ても可能かどうかが基準にされてるな？ 大体の事象は可能なんだよね？」

「お前という存在は私の計画には無かったな。規格外のイレギュラ―とは……」

そう言ってしばらく考えた後、話を切り出した。

「お前にはこの土御門と暗部組織の「グループ」に参加してもらいたいんだが良いか？」

「暗部？ まあ、分かった。その代わりに、大体の事を教えて貰おうか？」

「分かった。良いだろう」

そう言い、アレイスターはこの世界の事を話し始めた。

それによると、どうやら世界には魔術と言うものがあるらしい。

『必要悪の教会』 『ローマ正教』 『ロシア成教』 『翼ある者の帰還』  
とかその他色々あるらしい。

「全くビックリだ……。魔術なんてモノが存在するとはな……」

「だが真実だ。それに今からお前はこちら側に足を踏み入れるのだ。  
いずれ信じられるだろう」

「分かった。依頼が出来たら連絡してくれ」

そう言い、俺は淡希と土御門と共に戻っていった。

「それにしてもまさか淡希が暗部に関係あるとは思わなかったよ」

「私も連夜がこちら側に手を突っ込むとは思ってなかったわよ」

「まあ、成り行きだったけど久しぶりに淡希に会えて嬉しかったよ。

元気そうで本当に安心した。……………怪我させられたらソイツ地の果てまで追い掛けて血祭りに上げてやるから、何時でも言えよ?……………まあ、知り合いだったら無理だけどな?」

「大袈裟ね全く……………でもありがとう。嬉しいわよ」

(幼馴染みが虐められたっつーんだったらやり返しが基本だろ?っつーか、知り合い誰でもやられたらっつーんならやったヤツ血祭りにするがな?)

そんな事を淡希と言っていたら、土御門が急に叫んだ。

「うがあああ!!目の前でイチャイチャするんじゃないぜよ!!」

「うおっ!?イチャイチャって……………してねえだろ?なあ、淡希?」

「確かに連夜と話すときはいつもこんな感じだからイチャイチャではないわよ」

「常時イチャイチャしてんじゃねえぜよ!!!!」

そう言い、しばらくの間土御門は叫び続けていた。

「ああ、そう言えば今日学校だったな…。サボるか…遅刻だし…。」

「じゃあ、一緒に飯食いに行くにゃー」

「お、良いぜ！淡希も来るか？」

「私は今回は遠慮しとくわよ」

そう言い、淡希は歩いて去っていった。

「まだトラウマは癒えない…か。…………取り敢えず行くところか土御門？」

「分かったにゃー」

そう言って、俺は土御門と共にファミレスで飯を食いに行ったのだ。……。

第七話 暗部（後書き）

結標が……口調コレで良かったかな……。

ってか誰だよ！？

結標な感じがしねえよ！

コレ原作大丈夫か！？

行けるのか！？行けるのか俺！？

と、まあ次回も見てくださいとありがたいです！

第八話 初めての暗部依頼（前書き）

何故…こうなった？  
シリアスだと！

まあ、シリアスには慣れていませんが見てくれると有り難いです！

## 第八話 初めての暗部依頼

しばらく経ち、あと3日後に夏休みが迫っていた。

俺は夏休みに期待を込めていたワケなのだが、いかんせん一週間と  
いうのは期待する時になると死ぬほど長い。

「あ、あと3日……。な、長かった……」

「連夜一体どうしたんだ？最近無駄に『日が長い』とか言ってたけど」

「バカヤロー！当麻ア！テメエは夏休みが待ち遠しくないのかア！  
？」

「……………上条さんは一週間補習なんです……………」

当麻が落ち込みながらそう言ったのを見て、俺は心の中で当麻に合  
掌をしておいた。

「小萌先生からでも聞いたのか？」

「そんなんですよ！限り無く上条さんは哀しいんですが！？」

そう言う当麻を他所に俺の携帯が鳴り響いた。

「何だ？」

着信……………アレイスター。

(アイツどうやってあの円筒の中から電話かけてんだ?)

そんな疑問を感じつつも、俺は携帯を持つ。

「ワリ当麻！ちょっと電話来たから待っててくれ！」

「あ、ああ。分かったぜ」

俺は当麻からある程度離れたぐらいで電話をとった。

「もしもしアレイスターか。何のようだ？まさかいきなり依頼とかじゃねエだろっな？」

『ああ。そのまさかだ。今回の依頼を手短に言うぞ。お前には今回多少やり過ぎた人間を排除してもらいたい。これ以上は私の計画にも支障が出る可能性があるからな』

そうアレイスターは多少苛立っているかのような声を出す。

「ソイツは一体何をやったんだ？」

『ああ、ソイツは自らの独学で魔術を研究して「待て。科学側の人間……能力開発をした人間は魔術を使えないんじゃないのか？」……その男は能力開発を行っていない。そして、自らの情報網で魔術の存在を見付け出した。その男は、擬似的に自らの肉体を天使と融合させようとしていて、それにより爆発的な力を手に入れようとしているのだ。よってやり過ぎたその男を排除してもらいたい』

「天才過ぎた」という事か。しかし、俺が天使を宿した人間に勝てる予測はついているのか？地球を半分ほど焼く尽くせるようなヤツに勝てるのか？」

俺はこの前アレイスターから聞いた天使の情報を引き出す。

『大丈夫だ。式は未完成だ。まだ実現可能な域ではない』

「分かったよ……。ターゲットの居場所と、情報を送ってくれ」

『分かった。それではな』

そう言って、アレイスターは電話を切り、同時に情報と居場所がGPSで届く。

「はあ……。初めて人を殺るのか……。全く……。勘弁してもらいたいぜ……」

そう言いながらも、俺は当麻の所に一度戻る。

「ワリイ当麻！ちつと用出来た！また明日な！」

「あ？お、おう。分かった。じゃあな？」

「ああ、じゃあな！」

俺は当麻と別れた後、すぐに目的地に向かう。

ターゲットの名前は……。『呉織未全』くれしき みぜん 齢17の男子高校生であった。

「はあ……。マジ質ワリィわア……。同年代を殺せつつーのかよ……」

そう言いつつも、目的地に辿り着く。

「こんな廃屋に居やがるのか……?」

其処は人が住めるのか疑問に思えるくらい古臭く、そしてぼろぼろだった。

「仕方ねエ……。行くか……」

そう言いながら廃屋の中を進み、しばらくすると人陰を発見した。俺は、高熱の剣を作り出し構えつつ近寄る。

「お前が呉織未全か……?」

「おや。客とは珍しいな。いかにも。我が呉織未全である。汝は……そうか。我を主が命により排除してきたのであるか。その通りであるっ?」

呉織未全はクルリと座っていた椅子を回転させ、此方を見る。

「頭の回転が流石に早いな……。やっちゃいけない研究って自覚はあったんだな……。そうだ。確かにお前を排除しろという命令が下った。しかし、俺個人としては呉織未全。お前を排除したくない」

「フッフ……。甘い考えであるな。主からの命が下った以上、汝は我など人と思わず、即座に刈り取るくらい事はせぬといけなかったのだ。衆の前では個など微々たるものなのだ。個の考えなど棄てよ」

含み笑いをしながらも、俺に対し説教を仕掛けてくる呉織未全。

「お前。何で逃げようとしまない？」

「我は此処で研究のみが出来れば十分である。故に、我が研究場を出るしか無いと言っているのであれば、我が命は此処まで。汝に対抗できる程の力が有ると言うのならは多少の抵抗はするだろうが、我は汝に到底及ばぬ。だから、我は諦めるとしよう。……………最後に問おう。汝の名を教えてくださいか？」

潔い笑いを呉織は俺に対し見せ、俺はその呉織未全を見て動揺する。

「ワツケわかんねエよテメエ……。俺は篝火連夜だ……」

「いつの時代も俗に言う『天才』という存在は、頭のネジが抜け落ちて  
ちているモノなのであるよ。…覚えたぞ。良い名であるな。……  
その名我が魂に刻んでおくよ。……さあ……。殺れ」

そう言って俺を見つめる。

俺は剣を振り上げ、振りかざそうとするが、出来ずにいた。

「殺らぬのか？……もしや、汝は人間を殺るのが我が初めてか？」

「……ああ」

「そうか。ならば我が汝の最初の人間となるう」

「お前……死が怖くないのか？」

そう言うと呉織はやれやれ…といった表情をした後、笑顔で喋り始めた。

「怖いに決まってるであろう。」なら何でだ！」「……そう怒るでな

い。我は汝になら殺られても良いと思えた。直感的ではあるが、このように思える人間などそうはいないぞ？……………だから、汝が我を殺してくれ。誰かも知らぬ男に殺られるよりも汝に殺られる方が良い。ほんの一時ではあったが、我は汝を親友だと思えたよ」

「……………俺もだ。出来るならば……………もつと違う形で会いたかった……………」

「それは我も同意だよ。……………ではな。我が親友よ」

そう言い、呉織は殺れと促し、此方を見る。

「……………じゃあな……………」

俺は呉織の首筋に剣を振り降ろす。

直後に目に映ったのは離れた胴体と首。そして舞う鮮血。

俺は呉織の首を見る。

すると、呉織の唇が僅かに動き、『連夜……………汝の運命に幸あらん事を』という感じに動かし、そして……………動かなくなった。

「……………ッグ……………」

俺は自らの犯した行為に吐き気が込み上げるが踏み留まる。

「……………ツハア……………ハア……………」

口の中は胃酸が込み上げ、酸っぱいような感じが占めていた。

そのまま、一時間がたった……………。

俺は、何とか大丈夫なくらいに回復し、呉織の死体を近くに埋め、簡易的な墓を作る。

その時に呉織の人差し指にはめてあった指輪を取り外し、呉織を忘れない為にも同じく人差し指に取り付けた。

指輪の内側にはローマ字で呉織未全と書いてあった。

「……………呉織……。俺は……………これを糧に更に進んでいく……………お前の死を無駄にしない為にもな」

俺は呉織の墓に黙祷した後、振り返り歩き始めた。

そして、しばらく経った後に依頼の報告を行った。

「アレイスター。終わったぞ」

『そうか』

「呉織は……本当に死なねばならなかったのか？」

『当然だ。私の計画の障害となりえたのだからな』

「……………」

そう言い、俺は電話を切った。

「アレイスター……………。お前の計画とは……………なんだ？……………」

そう呟きながらも俺は帰っていくのだった……………。

第八話 初めての暗部依頼（後書き）

……寸劇？

いや、仕方無かったんだよ。

だって、人に手をかけた事の無いヤツがいきなり人を殺せるなんて性格的に人間として不味いよね？

出来れば、コレで大丈夫か感想とか書いてくれると嬉しいです！

次も頑張るので見てくれると有り難いです！

第九話 七月十九日（前書き）

日付的に原作突入！  
そして今回才力能力を大量に出してみたぞ！

第九話 七月十九日

さて、いきなりだが…俺と当麻は不良共から逃げていた。

「くそっ！しつげーなっ！」

「当麻ア？あの不良共ゴって良いかよ？」

「それしたらあのビリビリから助けてやったのに意味ねーじゃねえか！」

「はあ…。だよなア……………」

そう会話をしつつも俺は当麻と同じくらいのスピードで走っていた。

「さてこの逃げ足大王！！」

「アアン？殺っちまうぞテメエ？」

「ちよっ！？落ち着けて連夜！」

(ああ……。こんな事んなるんだったら御坂から助けるんじゃないかっ  
たなア……)

「ハア……。めんどくせー……。仕方ねエよなア？当麻！二手に別れっ  
ぞ！」

「え！？この展開から行くと上条さんだけ追われる気がするんです  
が！？」

「気のせいだ！」

実際は気のせいじゃないだろう。  
なんせ当麻は不幸体質。  
きつと見事に不良&御坂を引き寄せる事であろう。  
今回は……犠牲だな。

「じゃーな当麻！また会えたら会おうぜ！」

「上条さんを見捨てないでください連夜さん！！あっ！ちよっ！連  
夜あああ！！！」

当麻が助けを求めていたも俺は完全に無視し、街へと走り去っていた。

「ハハハハハッ！！やっぱ追ってこねエ！！助かったア！そして当麻！強く生きろなあ！」

そう言っつて、全力で余所見して走ってたら、誰かしらにぶつかっつた。

「うおっ！？」

「アアン？いつてエなア？殺されてエのかア？」

当たつたヤツを見ると、ソイツはこの学園都市最強LEVEL5第一位『アクセラレータ一方通行』その人であった。

「……………ファーツク……………。マアジかよ……………。怨むぜ当麻ア。テメエの不幸体質……………俺にも移ってんじゃねエかよ……………」

「何言っつてんだよオマエ。無視しやがってケンカうってやがンのかア？」

「まさか一方通行に当っちゃまうとはなア……」

「まあ良いかア……。オマエ死ねよ」

そう言うところ一方通行は俺に触れようとしてきた。

「ッおッ！？チッ！？洒落んなんねエツツーのー!!」

そう言うって全力で走り逃げ始める。

そして、しばらく全力で走り、工場らへんまで行ったところで立ち止まった。

「ハアハア……。撒いたか……」

「アアン？誰を撒いたってエ？」

「なっ!?!」

声がした方を見ると、其処には一方通行がいた。

「もう逃走劇はお仕舞いかア？」

「はあ……。やらねえといけねエのかよ……」

「まるで俺を倒せるみてエな言い方じゃねエかアオイ？」

そう言っつて、一方通行は苛立った雰囲気を出していた。

「やらねエとわかんねエっつー事だよ。さあやるっか？」

「面白エ！最ッ高に愉快的な死体にしてヤンよオ！」

そう言っつて、近くにあつた鉄骨を飛ばしてきた。

「参るねえ……。まあ良い。全力で行くぜエ！」

まず『一方通行を使える可能性（以後能力名のみ）』を使い、鉄骨を横に弾く。

「アアン？同じ能力かア？」

「残念。ハズレだ」

次に『多重能力・電撃使い&炭化能力』カーボンブラスターを使い、一方通行の近くの空気を一酸化炭素に電気分解・結合させる。

「……………ッ!？」

異変に気付いたのか一方通行は後ろに飛び退いた。

「あーら。何が起きたのか分かったのかア？」

「何しやがったんだテメエ……………」

「一酸化炭素を回りに出したただけだぜエ?さあて、愉快に逃げるのは誰かねエ?」

「テメエ……………。ブツ殺してヤンゾオ!!」

次に俺は『多重能力・人体霧散&毒素放出』ミストマン ボイスンデイスチャージを使う。  
人体霧散の能力は自らの肉体を霧状に分解し、攻撃を食らわなくす

る能力で、毒素放出は自らの肉体から極めて有害な毒素を放出させる能力だ。

この二つを合わせるのは、色んな意味で酷すぎる。

なんせ攻撃が当たらない上に、触れたらヤバい毒素が大量に充滿するワケなんだから。

「アツハツハ！当たたんねエなア！！」

「チツ！！なんなんだよオマエエ！！」

一方通行が投げた鉄骨や石やコンクリートは俺に近付いた瞬間にドロドロに溶けて消え失せていた。  
しばらくすると、急に一方通行は動きをやめたので、名乗りを始めた。

「俺か？俺は篝火連夜ってーんだ」

「そうかよオ！テメエ一体なんの能力だア？」

「んー。『幻想実現』って言うんだよねエ。可能性が0じゃない限り何でも出来んだよねえ…」

「最っ高に愉快的な能力じゃねエかア？けどよオ？テメエをブツ殺せ

たら無敵になれんじゃねエのかア？」

そう言つて一方通行は更にやる気を見せ、攻撃する気満々で此方を見てきた。

「ワオ……。そりゃア困つちまうねエ……。じゃあなア一方通行？」

「チツ！！オィィー！待ちやがれよオ！」

俺は即座に『瞬間移動』を使い、自らの寮へと逃げるのだった…。

第九話 七月十九日（後書き）

どんだけチートなんだ主人公……。  
書いてて思ってしまった…。

けど人体霧散にも弱点はある！  
風が吹いたらもう戻れない…。  
アレ？何か意味無い能力……。  
毒素放出は……弱点無し…。  
チートかコノヤロー！チートだよバカヤロー！

と、まあ次も見てくださいと有り難いです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9844n/>

---

とある魔術の幻想実現

2010年10月18日07時21分発行